第3263図

なかがわのぎく

Chrysanthemum Yoshinaganthum *Makino*

四国（徳島県）の那賀川中流の岩壁上に生ずる多年生の草本。極めて局部的な分布の地方種である。株元は多少木質に近く、上部は密に分枝して扁平な丸味のある株となる。その高さ30cm位。葉は菱状披針形或は菱卵形長さ4cm内外で白味ある灰緑色、上半に両側に少数の狭いが深い欠刻があり、下部は鮮やかな楔脚を示す。上部の葉は急に小形且無柄となる。晩秋に入ってから、枝端に稍〻繖房的な形に頭花をつけ、白花を開き径2.5cm許。総苞は半球形で、外片多数は線形肉質、内片はそれより遙かに広い。和名は産地那賀川を示し、高知県の植物採集家であった吉永虎馬氏が発見したものである。

第3264図

あざみこぎく

Chrysanthemum morifolium *Ramat.* var.

栽培の菊には種々の変化があり、一々を記録するのは煩に耐えないが、こゝに掲げたものは舌状花の発達が止まり、逆に筒状花冠が大形となったものである。普通筒状花の発達は「竹取」「獅子頭」等の細管咲の品種（管物という）にみられるが、いずれも花冠筒部の発達で、弁部は殆んど発達していない。それらに対して本品は5裂した花弁部と共に花筒も長く且つ広くなるもので、アザミの頭花を見る感がする。黄花のものが知られているが、他の色彩のものもあるであろう。

第3265図

かんぎく

Chrysanthemum indicum *L.* var. hiberinum *Makino*

アブラギクから園芸化して生じたもので、特に花期晩く、12月から1月に開花し、また茎及び葉と共に霜が下りても痛まない特質が賞用されて、栽培されている。黄花である。アブラカンギクに比べて、舌状花の発達がよい。しかし筒状花も比較的大きくなり全体が泡立ったように見える。葉は原種のアブラギクより短濶で、卵状広楕円形の輪廓を取る。又冬には葉の縁に近く黄色を帯びる傾向がある。時に舌状花冠の白いものあり、シロカンギク（*f.* albidum *Hara* =C. indicum var. hiberinum f. albescens *Makino*）というが、これの筒状花は至って小さい。

第3266図

あざみかんぎく

Chrysanthemum indicum *L.* var.

これも前図と同じくアブラギクの園芸品で、頭花は黄色。舌状花は短かいが所在は判る程度に長い。筒状花は花冠の一側（向軸側）で裂けているために、5裂した扇面状に展開し舌状花に稍〻似た外観となっている。葉は原種に近く、裂片の先が鋭尖している。培養の菊の品種の殆んど大部分はノジギク系で、アブラギク系は少ないので、後者を煩をいとわず掲出した。

第3267図

はないそぎく

Chrysanthemum marginatum *Matsum.* var. β. radiatum *Makino*
(=Ch. pacificum *Nakai* f. radiatum *Kitam.*)

イソギクの頭花に舌状花を生じたもの、イソギクが海岸に発達して舌状花を失った以前の形態へ先祖返りをしたものと思われる。しかし家栽のキクの花粉を受けた一代雑種である危険も考えられる。なおイソギクは染色体2n=90で、紀州より四国に生ずるシオギクは2n=72であって、恐らく前者は後者から導かれたものであろう。両者共にキク属中染色体数が多いのは海岸の特殊環境に対応した結果を示すものであろう。

第3268図

ふらんすぎく

Chrysanthemum Leucanthemum *L.*

欧洲原産の多年生草本。広く園圃に栽培される。地下或は地に接して多く分枝して叢生し、全株無毛、根生葉は越冬し、濃緑色、篦形、長さ6-9cm、やや長柄を有し、辺縁に大形の粗鋸歯があり、表面は光沢が強い。花茎は60-90cm許に達し、淡緑色、やや軟質で、上方まで小形で無柄の葉を互生し、6月頃、頂に径5-6cm許の一頭花を開く。総苞片は広卵形、又は長楕円形で内片は大きく、また縁膜が広い。舌状花冠は白色平開、筒状花は黄色、栽培品は野生品に比し、往々花径が大きい。パリー郊外などに多い故に、フランス菊の名を得た。